

Wuthering Heights における 帝国主義と Heathcliff についての一考察

渡部 悦子

キーワード：帝国主義 Imperialism, 植民地 Colony, ヒースクリフ Heathcliff,
リバプール Liverpool, 嵐が丘 Wuthering Heights

1. はじめに

Emily Brontë によって書かれた *Wuthering Heights*¹⁾ の主人公 Heathcliff は、理想像として描かれた人物像ではない。また、現実に存在した人物を観察し描写したのでもない。Heathcliff は、なぜか抽象的なイメージを表現するものとして描かれている。作家が何らかの意図を持って創り出した人物なのである。

Susan Meyer は、*Reverse Imperialism in Wuthering Heights*²⁾ で、Heathcliff の皮膚の色を取り上げ、帝国主義に支配される植民地とそこに暮らす人々の表象を Heathcliff に見出している。本研究では、Susan Meyer の論を中心に、*Wuthering Heights* の作品の中で Emily Brontë が描こうとした Heathcliff のイメージについて特に皮膚の色が描写されている箇所を取り上げ考察を進める。

2. 小説中の Heathcliff の由来

“Heathcliff” という語は、“heath” と “cliff” を合体させたものである。“heath” の一つの意味は、“heather” と同義で、荒野に群生するツツジ科エリカ属、カルナ属ギョリュウモドキ属などの低木で、ちいさな鈴形の紫、赤、白の花をつける植物のことである。もう一つの意味は、特に“heath”、すなわち“heather”の木が茂る酸性土壌の荒地、荒野を指す。この小説 *Wuthering Heights* の舞台は、まさに夏にヘザー：“heather” “heath”の生い茂る荒野なのである。そこには、“cliff”：崖もある。

3. Heathcliff の皮膚の色に言及している箇所

本章では小説 *Wuthering Heights* の中で Heathcliff の皮膚の色に言及している箇所を、取り上げて検討する。

3-1 *Wuthering Heights* に初めて来た時 小説では、Heathcliff がリバプールの街で乞食のように一人うろついていたところを Earnshaw 氏が馬に乗せて、*Wuthering Heights* に連れ帰った場面で、Heathcliff が描写されている。驚いた Earnshaw 夫人は、夫の Earnshaw 氏に次のように言う。

“---- how he could fashion to bring that gipsy brat into the house, when they had their own bairns to feed and tend for?”³⁾

この言葉は、一家の乳母 Nelly による間接話法で語られているので、“he”は“you”に、“they”は“we”に、“their”は“our”に換えて読むと、Mrs. Earnshaw の言葉になる。「食べさせて育ててはならない自分の子供達がいるのに、ジプシー風情の子を連れてくるなんて」と、Earnshaw 夫人はこの上なく驚く。Heathcliff はジプシー：“gypsy”と描写されている。これから Heathcliff の皮膚の色が白人の白ではないことが判る。浅黒い皮膚の色を想像させる。また、この屋敷で住み込みで乳母として働いている Nelly は、この時の Heathcliff を次のように描

写している。

“---a dirty, ragged, black-haired child, ”⁴⁾

ここでは、「汚い、ボロを着た黒髪の子」と髪の色が黒いといっているがこの子が黒人：“black boy”とはいってないのである。もし、アフリカ系黒人の子であれば、髪の写真だけでなく皮膚の色もはっきり黒と書いたはずである。

3-2 Linton 家に初めて姿を見せた時 Heathcliff と Earnshaw 家の娘の Catherine が賑やかで楽しそうな Linton 家のお屋敷を覗き見して Linton 家の犬に吠えられ、Catherine が犬に咬まれ Heathcliff は捕まってしまう場面がある。ここで、後に Catherine の義理の父になる Mr. Linton は、次のように Heathcliff について述べている。

“----that strange acquisition my late neighbour made, in his journey to Liverpool--- a little Lascar, or an American or Spanish castaway. ”⁵⁾

ここでは、Heathcliff を Lascar(子供のインド人水夫)か、あるいはアメリカ人かスペイン人の castaway(捨て子)ではないかと Linton 氏は推測している。この Lascar という語に関して、Susan Meyer⁶⁾ は、「当時の東インド会社が、イギリスの船員が病で亡くなったり、なんらかの戦闘で命を落とした場合に、インドで補充のために雇った子供の水夫と考えられる」という。また、「その子は、再び、故郷に帰る船に乗り込むまでは、港町で失職し、食べ物もなく、飢えてさまよう。」と記述している。ここで、Heathcliff は白人ではなく、インド人すなわちアジア系の有色の皮膚の持ち主あるいは白人と黒人の間に生まれた子供であると表現されている。アフリカの黒人の黒と Linton 氏は明言していないのである。

しかし、これらの記述に関わらず Susan Meyer は、可能性として Heathcliff を黒人の子供であることを示唆している。彼女は、この小説の舞台の18世紀当時のリバプールがイギリス、アメリカとアフリカを結ぶ三角貿易の航路の一つの拠点となる一大貿易港であったことに注目する。そして、Susan Meyer は、当時のリバプールが特にアフリカからイギリスに連れてこられた黒人奴隷の売買地点であったと次のように述べている。

“In 1769, the year in which Mr. Earnshaw found Heathcliff in the Liverpool streets, the city was England's largest slave-trading port, conducting seventy to eighty-five percent of the English slave trade along the Liverpool Triangle, exchanging manufactured goods from the Mersey region for West African slaves, who were exchanged for plantation crops in the American and the Spanish American colonies.”⁶⁾

この英文でいうリバプールのトライアングルは、マージー川河口にできた三角州のことで、ここでイギリス製の織物と植民地のプランテーションで採れた作物と黒人が交換されていたのである。Susan Meyer は、F. O. Shyllon の *Black Slaves in Britain*⁸⁾ を参照して、当時の奴隷船の船長、プランテーションのオーナー、政府役人、軍人等とともに、西インド諸島から連れて来られた何千人もの黒人奴隷がロンドン、リバプール、ブリストルなどの港町を中心に住んでいたと述べている。Susan Meyer⁷⁾ は、*The Gentlemen's Magazine* が1764年にはロンドンだけでも20,000人以上の黒人奴隷がいたと記述していると書いている。また、18世紀のリバプールのある通りは、“Negro Row”と通称されていて、そこでは、倉庫や、コーヒーハウス、商店、税関の外などで、黒人奴隷の公開オークションが開かれていたと調べている。彼女は、1768年の *Liverpool Chronicle* 新聞の次の広告を引用している。

“A fine Negroe Boy, of about 4 Feet 5 Inches high. Of a sober, tradable, humane Disposition, Eleven or Twelve Years of Age, talks English very well, and can Dress Hair in a tolerable way.”⁷⁾

Susan Meyer は、当時のイギリスには、黒人奴隷が多数いたことをこれらの資料から説明している。そして、Mr. Earnshaw がリバプールの町で Heathcliff を見かけたとき、Heathcliff がすでに誰かに所有されているかを聞いて回ったという点に注目している。

“ --- was a tale of his seeing it starving, and houseless, and as good as dumb in the streets of Liverpool, where he picked it up and inquired for its owner. Not a soul knew to whom it belonged, he said, and his money and time being both limited, he thought it better to take it home with him at once, than run into vain expenses there: ”⁹⁾

所有者がいるかどうかというのは奴隷の話である。そこで Susan Meyer は、Heathcliff は黒人奴隷ではないかと推測しているのである。なお、みなし子の Heathcliff は、“it” という代名詞で人間扱いされていない。

3 - 3 Nelly との会話 Heathcliff と Nelly の会話で Heathcliff が自分の皮膚の色、髪の色に言及する場面がある。

“But, Nelly, if I knocked him down twenty times, that wouldn't make him less handsome, or me more so. I wish I had light hair and a fair skin, and had a chance of being as rich as he will be!”¹⁰⁾

ここでの him は、Catherine に好意を持ち Heathcliff のライバルである息子の Linton のことである。Heathcliff は、「僕も、金髪と、白い肌が欲しかった。そしてパリッとした服装をして、行儀作法も負けないくらい心得て、そして同じように金持ちになりたかった！」という。金髪も白い肌も、彼にはないものなのだ。Heathcliff は、さらに次のようにいう。

“In other words, I must wish for Edgar Linton's great blue eyes, and even forehead,” he replied. “I do---and that won't help me to them.”¹¹⁾

ここで、Heathcliff は Edgar Linton を羨んでいるのである。Edgar Linton の青い眼と秀でて見えるおでこが羨ましいのである。そして、望んでも無駄なことも承知しているのである。眼の色、皮膚の色、髪の色、これらは遺伝によるものであり、このことで不利益を受けるのは、いわゆる不条理といわざるをえない。当時、英国では有色人種は、白人が持っている富と白人の文化からは遠い存在であったのだ。

この Heathcliff の嘆きに対して、Nelly は、次のようにいう。

“A good heart will help you to a bonny face, my lad,” I continued, “if you were a regular black; and a bad one will turn the bonniest into something worse than ugly. And now that we've done washing, and combing, and sulking---tell me whether you don't think yourself rather handsome? I'll tell you, I do. You're fit for a prince in disguise. Who knows but your father was Emperor of China, and your mother an Indian queen, each of them able to buy up, with one week's income, Wuthering Heights and Thrushcross Grange together? And you were kidnapped by wicked sailors, and brought to England. Were I in your place, I would frame high notions of my birth; and the thoughts of what I was should give me courage and dignity to support the oppressions of a little farmer!”¹²⁾

ここで、Nelly は、Heathcliff に対して、“a regular black”と黒人という語を使っている。Earnshaw 家の人々も Linton 家の人々も、あえて使わなかった言葉である。Nelly は、Heathcliff に、ずばり上品ぶらずにいえるのである。また、「良い心を持っていると、素敵に見えるようになる。顔を洗って、髪をとかして、むっつり顔をすると、ほらハンサムに見えるでしょう。あなたの父は中国の皇帝で、母はインドの女王かもしれない。どちらも一人で、ハイツとグレンジを一週間分の収入で買い上げれるのよ。自分はそういう生まれだと考えたら、勇気と威厳が持てるでしょう。つまらない農夫が何か仕掛けてきても平気でしょう。」と、Nelly は、Heathcliff を励ます。この、中国とインドという言葉から判断すると、Heathcliff の皮膚の色は、アフリカ系の黒でなくて、東洋系の黒さと考えられる。

このシーンについて、小菅東洋氏は、『エミリー・ブロンテ論』の中の『嵐が丘』と時代精神』のなかで、次のように述べている。

ここには、ヒースクリフが先に述べたように何らかの価値転換をして、可能な方法で身分を変えることによって立場を逆転させることができると励ますネリーの魂胆があらわれている。このようにネリーという人物は、全編を通してエミリーの意図するドラマの舞台まわりの役目を荷なっているのである。¹³⁾

Nelly の魂胆とは何かよくわからないが、彼女がこの小説のなかで果たしている役割は、小菅氏の言うのが当たっているであろう。

内田能嗣氏は、同じく『エミリー・ブロンテ論』の中の論文 '1980年以降の『嵐が丘』の評価' で、Nelly について次のように書いている。

ギルバートとグーバーはネリーを「窓を閉じて女性を居間に閉じ込める」伝統的紳士階級、すなわち男性社会に都合のいい「ミルトンの料理女」といっているが、1985年に出版された『エミリー・ブロンテ』のなかでジェイムズ・キャバナーも同様に家父長制中心のファミリー・ロマンスという点に注目して『嵐が丘』を評価している。¹⁴⁾

ここでいうように、Nelly は、当時の家父長制中心の社会を肯定しているのであろうか。いや、彼女はただの料理女ではない。支配する側と支配される側という点でいえば、人に使われる支配される側の人である。その立場でありながらいや、それだからこそ Nelly は、全ての登場人物を、一段と高いところから見れるし、しかも、時間という要素も入れて考えることができる人物なのである。Susan Meyer の Imperialism の図式では、黒人、有色人が、搾取され支配される側の人であり、ネリーは、皮膚の色ではその範疇には入らないが、ここでは Heathcliff 側に立っている。つまり、白人のなかにも、支配され搾取される人々や国があるのである。そして、Nelly は、力の構造が変われば、すなわち金持ちになれば、全てが変わるということを彼に教えているのである。ちなみに、この小説が書かれた19世紀は、イギリスが、中国、インドと三角貿易をして、植民地支配を拡大していった時期である。この、“a little farmer”: 取るに足らない農場主とは、なんとという強烈な表現ではないか。これは、後に、Catherine の夫となる Linton や、当時の地方の紳士たちを指しているのである。

3 - 4 アメリカから帰ってきた Heathcliff

“Nelly, is that you?”¹⁵⁾

と Nelly に声をかけたのは、誰あろう Heathcliff であった。

“-----, I distinguished a tall man dressed in dark clothes, with dark face and hair,”¹⁶⁾

Nelly は、Heathcliff をその “dark face and hair” : 黒い顔と髪から、見分けたのである。小説の出だしでは、ジプシーのようだと形容されていた Heathcliff の皮膚の色は、だんだんとはっきり黒と表現されるようになってくるのである。Susan Meyer は、1834年に、英国領で奴隷を扱うことが禁止になったが、黒人奴隷は、その後も存在したと述べている。Susan Meyer のように黒い皮膚の Heathcliff を、当時、イギリスが貿易をしながら植民地化していった、アフリカ、インド、中国その他のアジアの国などの植民地の国々と人々の表象と見ることが、できる。しかし、Heathcliff その人は、*Wuthering Heights* ではアフリカ系の黒人とは、描かれていない。そして、人が人を支配し、征服したりされたりという、この大きな時代の波の動きと、それに抵抗した人々という観点からこの小説をみると、この小説は単なる恋愛物語ではなくなるのである。若干30歳でこの大きなテーマの物語を描いた Emily Brontë は、なんとすごい作家かと驚嘆させられる。

かつての Nelly の励ましの言葉以上の紳士になって Heathcliff は、アメリカから帰ってきたのである。Linton 家の居間に現われた Heathcliff は、次のように、描写されている。

Now fully revealed by the fire and candlelight, I was amazed, more than ever, to behold the transformation of Heathcliff. He had grown a tall, athletic, well-formed man, beside whom my master seemed quite slender and youth-like. His upright carriage suggested the idea of his having been in the army. His countenance was much older in expression and decision of feature than Mr. Linton's; it looked intelligent, and retained no marks of former degradation. A half-civilized ferocity lurked yet in the depressed brows and eyes full of black fire, but it was subdued; and his manner was even dignified, quite divested of roughness, though too stern for grace.¹⁷⁾

Heathcliff は、みんなが驚くほどに、見事な紳士になって帰ってきたのである。かつて、Nelly が自分で高貴な生まれだと思えば、素敵な人になれるといったのを実行したかのような、立派な紳士になって、帰ってきたのだ。アメリカに3年いて、軍隊にいたらしい身のこなしで、金持ちになって帰ってきたのだ。当時、Susan Meyer がいうように、彼がアフリカ系黒人であると仮定すると奴隷制度がまだ残っているアメリカで成功する可能性はかなり低かったであろうと考えられる。ここでも、Heathcliff は、アフリカ系黒人ではないと考えるほうが、妥当であると考えられる。

4. 結び

Emily Brontë 著 *Wuthering Heights* についての Susan Meyer の *Reverse Imperialism in Wuthering Heights* が取り扱っている主人公 Heathcliff の解釈について、検討を試みた。Susan Meyer は、少年時代に拾われた主人公を黒人であろうと推定しているが、筆者は、小説の描写の詳細から、ヒースクリフは、アフリカ系の黒人ではなく、アジア系の皮膚の黒さを持っている人物として Emily は、描きたかったのではないかと考える。19世紀の初頭の米国の奴隷解放の歴史の進行の年代から考えて、この小説は18世紀が舞台なので Susan Meyer の説には無理がある。英国、中国、インドを結ぶほうの三角貿易を背景として、主人公 Heathcliff をアジア系の人物と解釈するのが自然でないかということを提案したい。そして、それ以上に当時ハワースに一番近かった港のリバプールは、2つの三角貿易；一番目は、17世紀～18世紀にかけてイギリスとアフリカ、西インド諸島の間で、砂糖、銃、奴隷が取引された貿易。2番目の三角貿易では、19世紀に入ってからイギリスと中国およびインドの間で、茶、アヘン、綿織物などを、銀を対価としながら取引する貿易が行われる、この2つの三角貿易の拠点港であったこと、そして、イギリスが、世界に広がる帝国を築いていくその壮絶さ、その中で運命に翻弄され不条理の中を生きていかねばならない人々などが、この小説にさまざまな要素を織り込み不滅ともいえるエネルギーを与えていると考えられる。イギリスは、有色人の国を相手に、植民地を増やしていったのである。おりしも、産業革命の波も押し寄せ、時代が大きく変わるときであった。この小説は、Susan Meyer がいうように、植民地政策；帝国主義

という隠れた構造を持っているという指摘は、まさにそのとうりだといえる。人間が人間を売買するという現実、厳しい自然のなかで生きていかねばならない現実、奴隷のような身分から這い上がる Heathcliff、奴隷にならないために Lintonと結婚した Catherine。この小説は、まだまだ謎に満ちている。今回は、登場人物のヒースクリフの皮膚の色に焦点をあてて考えてみた。植民地化主義；帝国主義は、この小説を理解する上での大きな鍵であることを、確信する。

筆者は、以前に「ブロンテ姉妹におけるアイルランドの背景(1)」において、Brontë一家がアイルランドの血を引いており特に祖父は、数奇な運命をたどったことを述べた。そして「ブロンテ姉妹におけるアイルランドの背景(2)」において、Heathcliffはアイルランド人の子供ではないかと論じた。当時リバプールは、大飢饉に見まわれアメリカに移住するアイルランド人で溢れていたからである。しかし、今回、Heathcliffの皮膚の色に注目すると、Heathcliffがアイルランド人というのは無理が出る。しかし、Susan Meyerの有色人 Heathcliffに帝国主義の表象を見る構造をあてはめると、アイルランドはイギリスの植民地になっていたのも、Emily Brontëは Heathcliffを通して、アイルランドがイギリスの植民地になっていることに対する隠れた抗議をも表現したとも読むことが出来る。

参考文献

1. Brontë, Emily. *Wuthering Heights*, W. W. NORTON & COMPANY third edition. (1990)
2. Meyer, Susan. *Imperialism At Home*, 96~125, Cornell University Press. (1996)
3. Brontë, Emily. *Wuthering Heights*, 29, W. W. NORTON & COMPANY third edition. (1990)
4. Brontë, Emily. *Wuthering Heights*, 29, W. W. NORTON & COMPANY third edition. (1990)
5. Brontë, Emily. *Wuthering Heights*, 39, W. W. NORTON & COMPANY third edition. (1990)
6. Meyer, Susan. *Imperialism At Home*, 97~98, Cornell University Press. (1996)
7. Meyer, Susan. *Imperialism At Home*, 99, Cornell University Press. (1996)
8. Shyllon, F.O. *Black Slaves in Britain*, New York:Oxford University Press. (1974)
9. Brontë, Emily. *Wuthering Heights*, 29, W. W. NORTON & COMPANY third edition. (1990)
10. Brontë, Emily. *Wuthering Heights*, 44, W. W. NORTON & COMPANY third edition. (1990)
11. Brontë, Emily. *Wuthering Heights*, 44, W. W. NORTON & COMPANY third edition. (1990)
12. Brontë, Emily. *Wuthering Heights*, 44~45, W. W. NORTON & COMPANY third edition. (1990)
13. 柳 五郎編、『エミリ・ブロンテ論』、119, 開文社出版、東京(1998)
14. 柳 五郎編、『エミリ・ブロンテ論』、174, 開文社出版、東京(1998)
15. Brontë, Emily. *Wuthering Heights*, 72, W. W. NORTON & COMPANY third edition. (1990)
16. Brontë, Emily. *Wuthering Heights*, 72, W. W. NORTON & COMPANY third edition. (1990)
17. Brontë, Emily. *Wuthering Heights*, 74, W. W. NORTON & COMPANY third edition. (1990)
18. 渡部悦子,「ブロンテ姉妹におけるアイルランドの背景(1)－祖父 Hugh Brunty の数奇なる幼少時代－」, 『金蘭短期大学研究誌第22号』(1991)
19. 渡部悦子,「ブロンテ姉妹におけるアイルランドの背景(2)－『嵐が丘』の構造とアイルランド的背景－」, 『金蘭短期大学研究誌第25号』(1994)